

日本語の歌の言語学分析

Linguistic Analysis of Japanese Songs

ホーランドミンクレイ・ドロシー
Dorothy F. Holland-Minkley

自然な日本語のためには、文法だけでは足りない。文が文法的でも、ずいぶん正しい文じゃないこともある。自然な日本語は自然な英語と違う。英語の文では、焦点が人のことだが、日本語では、焦点が状況だ。確かに日本語でも人が焦点の文が書けるが、それは大体自然じゃない。そして、簡単じゃない日本語が分かりたいと、文の形が大切だ。普通の語順 (word order) は SOV (Subject-Object-Verb) だが、語順が変わってもはっきり分かる可能性はまだある。

普通の言語学の研究の仕方は本や会話の言葉を調べることだが、歌でも同じ特徴がある。この作文では、まず日本語が状況焦点言語 (situation-focused language) で、英語が行為者焦点言語 (actor-focused language) であること、次に日本語の普通じゃない語順がある文の分かり方を説明する。

状況焦点言語には二つの特徴がある。一つが動詞のタイプだ。行為者焦点言語の英語では、他動詞 (transitive verb) が一番よく使われるけど、状況焦点言語の日本語では、自動詞 (intransitive verb) の方がよく使われる。他動詞があれば、行為者 (actor) が必要だが、自動詞なら、行為者がなくてもいい。英語では、それが "I closed the door." と "The door closed." の違いだ。もう一つの状況焦点言語の特徴が代名詞 (pronoun) の存在だ。前の英語の例では、"I" という代名詞があったけど、日本語の学生は代名詞を言わなくてもいいということをも早く習う。

その二つの特徴が歌によく見える。これが「テニスの王子様」の "Mighty Wing" からの例だ。

日本語：聞こえてくるのは自分の鼓動だけ
自然な英訳 (natural translation) : I start to hear only my heartbeat

直訳 (literal translation) : What becomes audible is solely one's own heartbeat

この日本語の例には、他動詞も代名詞もない。代名詞がないから、ダレの鼓動が聞こえてくるのがはっきり分からない。普通の英語の歌では、歌者は自分のことについて歌うので、自然な英訳は「自分」より「僕」を選んで、自動詞の「聞こえる」を他動詞の「聞く」に変える。その結果、英訳は行為者に焦点をあてて、はっきりしていないところをはっきりさせる。

二番目の例には SOV じゃない語順が見える。この例は“Do as infinity”の『アザヤカナハナ』の歌詞だ。

日本語：誇り被っているよ / 鮮やかな花
自然な英訳：The vivid flower / Is wearing its pride
直訳：Wearing its pride— / the vivid flower

この例では、語順が SOV じゃなく、(O)VS だ。確かに、この例にはフォーマルな文法がない。しかし、日本人にはよく分かるはずだ。面白いのが終助詞「よ」の大切さだ。このままでは文が(O)VS でも、「よ」がなければこの例は名詞句(noun-phrase)“The vivid flower that is wearing its pride”になってしまう。「よ」は必ず文の終わりにくるのでこの例は文だとはっきり分かる。同じ言葉が同じように並んでいるけれど、終助詞が意味を変える。

まとめに、日本語は、他動詞より自動詞の方をよく使い、代名詞などあまり使わなく、普通の文が状況を一般的に描くので、状況焦点言語と言う。そんな一般的なイメージを英訳したいなら、行為者を決めて具体的な言葉を入れなくてはならない。最後に、日本語の終助詞は、文の形をはっきり決めて、語順が変化できる可能性を作り出す。